

平成29年12月15日(金)
「農林水産省」講堂

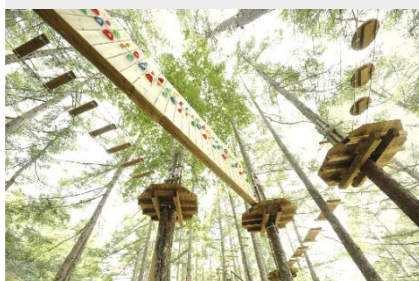


『多様化するニーズに対応した、 新時代の森林を活用した観光・交流産業のあり方』



宮 林 茂 幸

(東京農業大学 地域創成学科 教授、
美しい森林づくり全国推進会議 事務局長)



多様化する未来社会

1. 第4次産業革命:バーチャルリアルティ(VR)
2. インバウンドとアウトバウンド
3. グリーン・エコノミやグリーン・インフラ
安心・安全な暮らし
4. 求められる人間らしさ:健康・豊かさ
社会活動と余暇活動→本物の観光レク



森林文化や農山村文化→里山文化

第四次産業革命（IoT産業革命）



1 蒸気機関

18世紀



2 電気エネルギー

20世紀初頭



3 コンピューターによる自動化

20世紀後半

To the future...

4 IoT 産業革命

2015年～

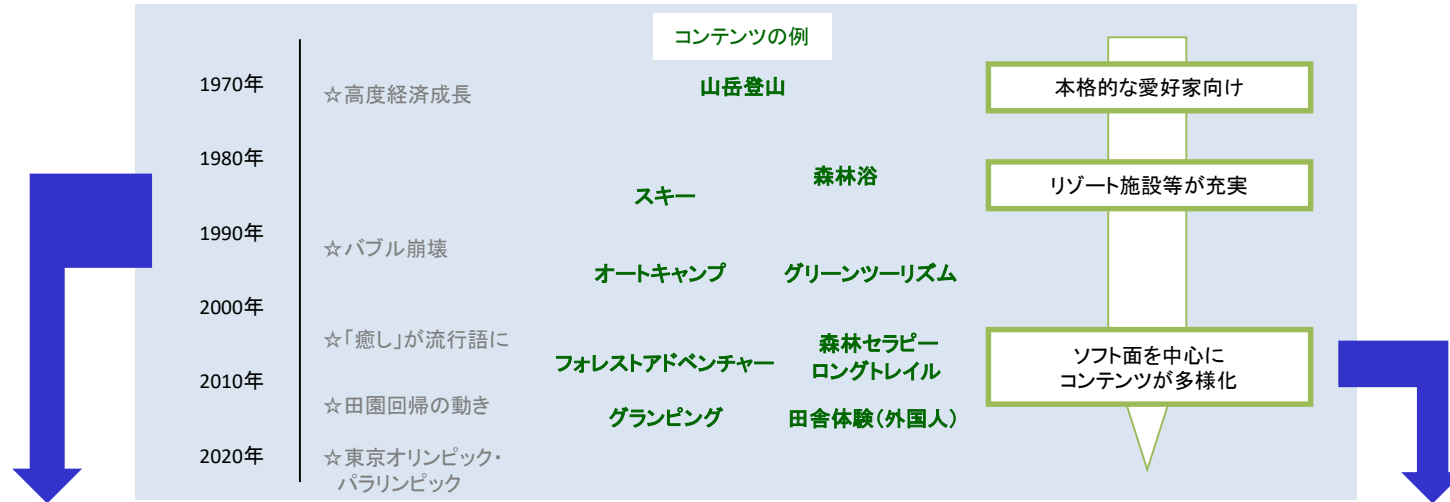


四次産業革命の社会

1. デジタル市場の特徴：VRやインバウンド
2. 海外における制度的な対応：
3. 横断的制度の現状と課題
 - ①競争政策：益々激しくなる情報化
 - ②多様なデータ利活用と保護
 - ③情報のシステム化と知的財産

森林の空間利用の動向

- 森林は、原始的な自然環境や里地里山の美しい景観を形成する重要な要素であるとともに、森林浴やアウトドアスポーツなどの保健・レクリエーションの場としての機能を有しており、そのポテンシャルを農山村地域の活性化に生かしていくことが重要。
- 森林レクリエーション関連のコンテンツは時代と共に変遷。

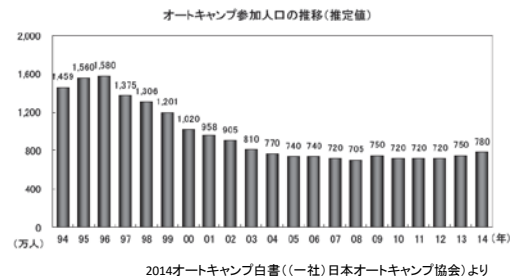


➢ リゾート施設やキャンプ場の利用人口はピーク時より相当減少するとともに、施設の老朽化等が課題になっている。

スノーリゾート人口は、ピーク時の4割強まで減少



オートキャンプ参加人口は、ピーク時の約半分まで減少



- 一方、価値観の多様化に伴ってコンテンツは多様化。
- また、地域に密着した体験型旅行である着地型観光の市場規模の拡大や、インバウンド需要の増大により、特に観光分野での森林の活用が期待される。

森林セラピー・森ヨガ



2015年の訪日外客数は1900万人超まで伸びている



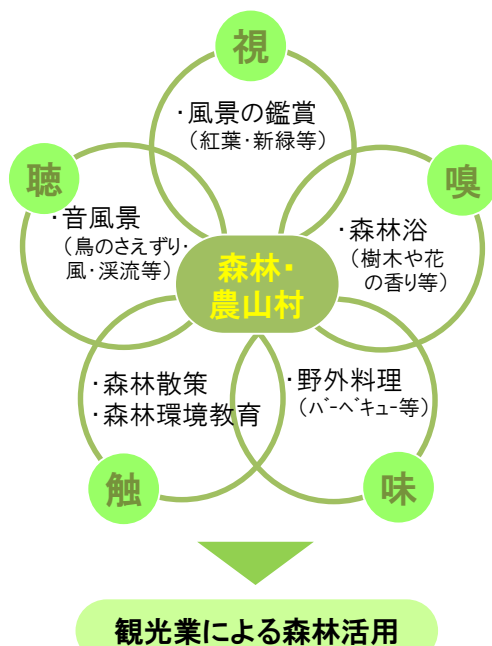
レクリエーション市場の特徴

1. 余暇の目的は、「心の安らぎ」「健康・体力の向上」が上位。（2012年レジャー白書）
 2. 最近では「歩く」レジャーが人気に。（2015年レジャー白書）
 3. 余暇活性化には
 - ・健康・年齢によらず楽しめるメニュー
 - ・子連れでも楽しめる工夫
 - ・好きなレジャーが楽しめる複合施設と交通アクセス
 - ・情報提供、きっかけ
- 等の複合対策が必要。（2013年レジャー白書）

参考:レジャー(余暇活動)全体の傾向

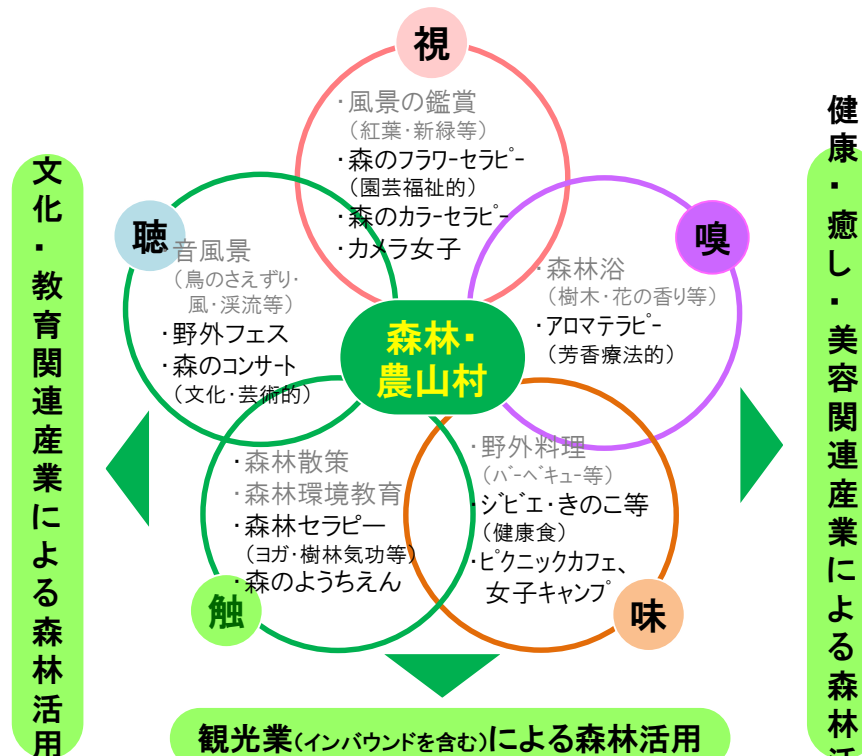
“ハード依存型”の森林総合利用から、“ソフト重視型”の森林総合利用へ ～「森林サービス産業」の提案～

これまでの森林総合利用
～施設(ハード)面への依存度が高く、
訴求対象層が限定的な取組が中心～



- ・ 施設整備を通して、森林空間が生み出す五感の恵みを、“受動的”に享受する“観光”を基調とした取組が中心
- 施設利用料も、プログラム料も無料・安価が多い
- ⇒ 施設の維持管理費が地域への負担となり、施設の改修やプログラム開発への再投資ができず、老朽化して利用が低迷する施設が多い

これからの“高付加価値型”の森林総合利用
～新たな都市部のニーズに合わせた分野・テーマ毎に、高品質で
ホスピタリティの高いプログラムを創出～



- ・ 森林空間が生み出す五感の恵みを、新たなニーズに合わせて、多様な分野・テーマで“説教的に享受できるプログラムの開発を促進
- 健康・癒し・美容分野や文化・教育・子育て支援分野のサービス産業の市場に訴求できるような、高付加価値でホスピタリティが高い、新たな「森林サービス産業」を創出
- ⇒ 地域に多様なコンテンツを集積して、通過型から滞在型、リピート型へ

森林・農山村の地域資源を活用した、“高付加価値型”の「森林サービス産業」の創出 ～消費牽引層の女性等のニーズに合わせたプログラムと、森と人が共生するライフスタイル“Forest Style”の提案～ (イメージ)

森のおんがくかい



野外フェス



森のフラワーセラピー



カメラ女子



森林セラピー・ヨガ



森のようちえん



視

- ・風景の鑑賞
(紅葉・新緑等)
- ・森のフラワーセラピー
(園芸福祉的)
- ・カメラ女子
(文化・芸術的)

嗅

- ・森林浴
(樹木・花の香り等)
- ・アロマセラピー
(芳香療法的)

味

- ・野外料理
(ハーベキュー等)
- ・ジビエ・山菜等
(健康食)
- ・ピクニックカフェ、
女子キャンプ

触

- ・森林散策
- ・森林環境教育
- ・森林セラピー
(ヨガ・樹林気功等)
- ・森のようちえん

聴

- ・音風景
(鳥のさえずり・
風・溪流等)
- ・森のコンサート
(文化・芸術的)

森林サービス
産業(仮称)

森と人が共生する
新たなライフスタイル
“Forest Style”

女子キャンプ



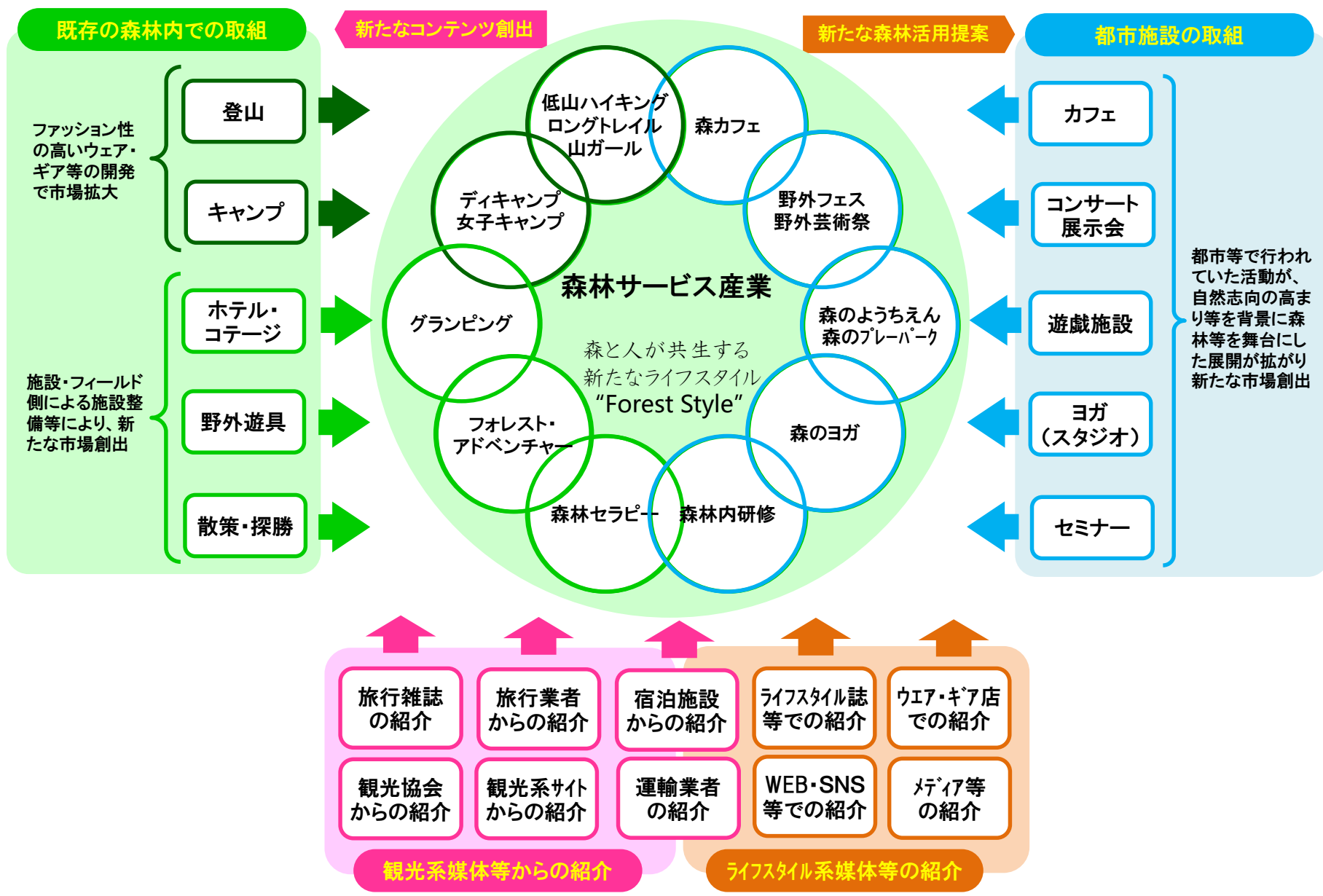
グランピング



ジビエ・ハーベキュー

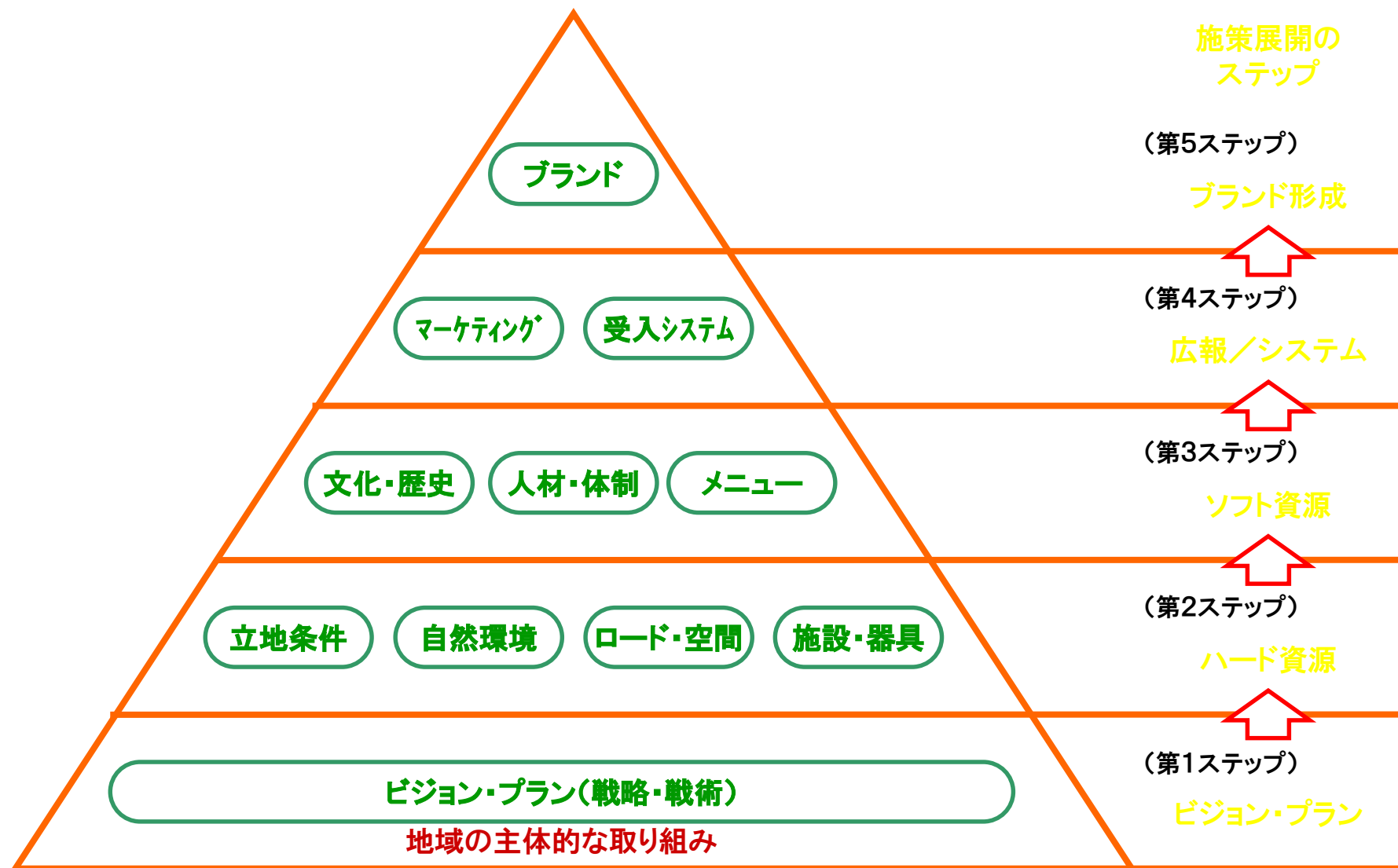


既存の観光・交流やアウトドア関連市場からの誘客に加えて、 都市部の多様な施設・事業者と連携して、新たなライフスタイル提案としての誘客の促進



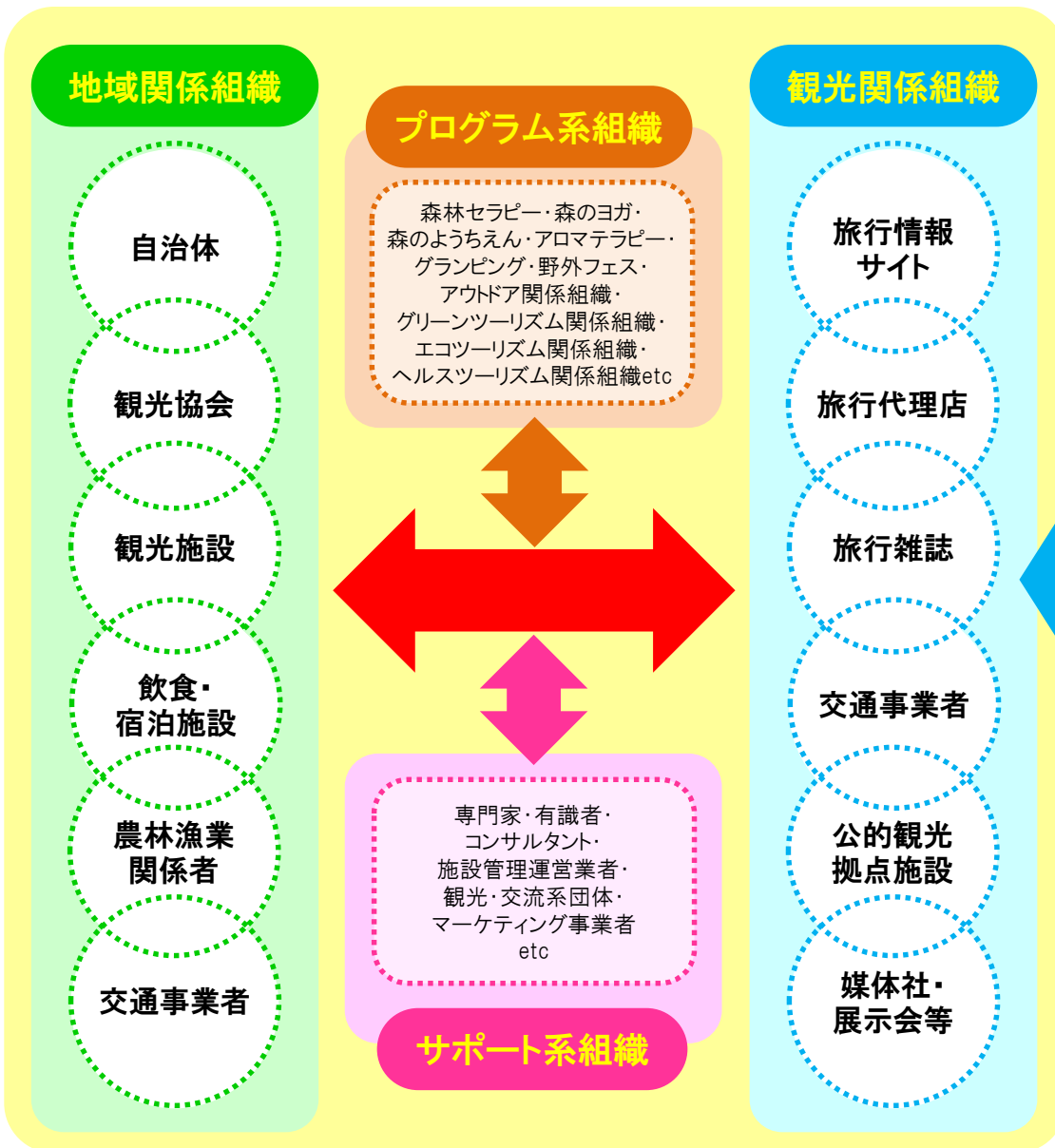
地域における“観光・交流”等の推進に向けた取組のステップ

～中長期的な視点から、段階的にビジョン・プラン、ハード・ソフト、広報・ブランド構築に取り組むことが重要～

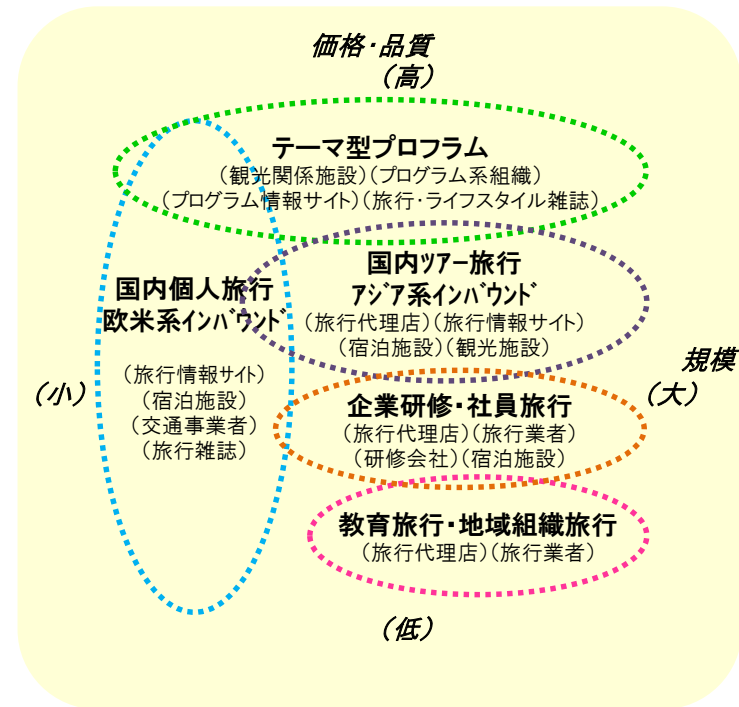


地域における“観光・交流”等の推進体制構築とパートナーの考え方

【推進体制構築に向けたパートナー(イメージ)】



【多様な旅行形態と送客組織】(イメージ)



※ 価格・品質・規模等について多様な旅行形態・送客組織があり、どの顧客層をターゲットにするかによって、価格・品質・規模やパートナーとなる観光関係組織が変わってくることをイメージを伝えるものです。
その為、各ジャンルの取組が、上記の区分に必ず当てはまるというものではありません。

特集

森と人とのふれあい新時代 ～“山の日”を追い風に～

森林サービス産業の 活性化には オリジナリティーが 大切に

3

“山の日”を追い風として、これまで森林とふれあってこなかった人たちにも森林を訪れてほしい。それならば、森林側もそういった人々を迎えるための考え方を整理することが必要となるだろう。ここでは、森林サービス産業の先行例ともいえる2つの施設に、近年の客層の傾向と、それに対する考え方や取り組みについて聞いてみた。

新たなアウトドアブーム 到来の予兆

「グランピング」という言葉を存じだろ。グーグル(www.google.com)に魅力に満ちた「キャンピング(camping)」を掛け合わせた造語であり、自然に囲まれたロケーションで、ホテルのような施設やサービスを経営し楽しむアウトドアスタイルのことをいう。海外ではすでに人気を集めており、日本でも広がりはじめている。

もともと青少年教育のプログラムであったキャンプが、レジャーとして認知されるようになったのは、1990年代に入ってからだ。キャンピングカーを使ってキャンプを楽しむような海外のアウトドアスタイル

イルがファッションとして人づきたこと、また、バブル崩壊後で安いレジャーを求める世相があったことなどから、オートキャンプを中心としたアウトドアブームが一気に広がった。

ただ、このブームが去るのは早かった。「オートキャンプ白書2015」(一般社団法人日本オートキャンプ協会)によると、オートキャンプの参加人口(推定値)は、1996年の1580万人をピークに減少していき、2004年から700万人台の横ばいとなっている。ここでいうオートキャンプは、車でキャンプ場に乗り入れて車の横にテントを張るようなものだけでなく、単に交通手段として車を使ったキャンプも含まれる。

人と自然との インターフェイスとしての 施設づくり

「ところがここ数年は、グランピングが注目されはじめていることもあって増加傾向にあり、2014年は780万人となっています。その要因としては、以前のアウトドアブームに野外で遊ぶ経験をした子どもたちが大人になってきたこととあると考えられています」というのは、(株)フジヤマクオリティアウトドアリゾート事業部統括ディレクターの与茂雅之さん。フジヤマクオリティは富士山周辺を中心に飲食物販事業と、PICAをブランド名とした宿泊事業を展開しており、現在はアウトドアリゾート施設を9カ所で運営している。

フジヤマクオリティが設立したのは1995年。「日本のキャンプは疲れた」、そんな日本のキャンプを憂えるという想いから「人と人、人と自然とのインターフェイス(接点)になる」をミッションとして掲げており、日本での高規格キャンプ場の先駆けとなってきた。

近年、グランピング(特集3参照)への注目が高まるなど、アウトドアブームが再燃している。また、森のヨガや森のようちえんなど、女性や子育て世代にも響く取り組みも盛んになってきており、森と人とのつながりの新しいスタイルが広がっている。これらを「森林サービス産業」として活性化させていくことも検討されているところだ。今年から8月11日が国民の祝日「山の日」となった。昼休みの帰省や旅行などで森林とふれあう機会も多くなるであろう「山の日」も、このような流れの追い風とすべきだろう。今回は、これからの森と人とのふれあいについて考えてみる。

「自分でテントを張って、食事をしつつ、後片付けをしてという行為はブーム時はそれを楽しめたとしても、ブームが去ると途端に面倒になってしまふものです。そこで私たちは設立以降、コテージをはじめとして、さまざまなアウトドアの楽しみの提案をしてきました。各地のPICAで、森林の中や湖の畔、遊園地の隣といったさまざまなロケーションにあわせたバリエーションを提案し、それが評価されたことで、アウトドアブームが去ったあとも維持してこれたのだと思います」と与茂さん。

その現在の象徴といえるのが、PICA山中湖ヴィレッジにある「Hammock Cafe」だ。都会的なカフェメニューを森の下でハンモックでゆたかに楽しむことが好評で、年々来客数が増えているという。「PICA山中湖ヴィレッジは、コテージなどの宿泊施設とあわせて、周辺の別荘のオーナーが友達を呼んで食事をするのに最適なレジャーのスポットやカフェを設け、別荘地としての山中湖のブランド力を上げていくという意図が込められたものです。どちらかと

特集／森と人とのふれあい新時代～“山の日”を追い風に～

3 森林サービス産業の活性化にはオリジナリティーが大切



「山の日」を前にオープンした「Hammock Cafe」。森を背景にしたカフェは、多くの人々に利用されている。



「山の日」を前にオープンした「Hammock Cafe」。



「山の日」を前にオープンした「Hammock Cafe」。

ている。そのひとつが、キャンプ場の「プレーパーク化」だ。

「本来キャンプ場は自由に遊ぶでよい場所なのですが、案外最近の子供たちはそれが苦手なようです。そこで昨年から、キャンプ場内を、自分の責任で自由に遊ぶ。をモットーとしたプレーパークに見立て、ロープワークとかナイフを使った工作など、子ども向けイベントを開催しています。スタッフは付きますが、説明や禁止事項は最低限にして、自然の中の創意工夫を褒められるようにしています。森林や自然を体感してもらえればと考えています」

森林に来る 客層が変わってきた その人たちに どう森林を伝えるか

栃木県茂木町にあるツインリンクもてぎは、自動車メーカーのホンダが所有するサーキットであり、1997年に開設された。総面積640haのうち開発されているのは3分の1で、約400haの里山がサーキットを取り囲んでいる。そのうち42haを「いつも、誰でも、思いやり」をテーマにしたオープンしたのが、ハローウッズである。

「森が平等に食事ができるというのはおかしいでしょう。最長で4日間食べられなかった子もいます。それでも、伝えるべきことは伝えることで、最終的にはみんな、すこく近しくなりますよ」

ある意味で熱心に森林に向き合うコアな参加者が多かったハローウッズだが、近年は客層が変わりつつあり、気軽に森林を楽しむ人が増えている。その理由として、アウトドア的な要素を持つ、木々の間に張られたワイヤーを滑車を使って滑るジブラリンの開設や、今年の3月にグランピング的な

「セフトアップサイト」を新設したオートキャンプ場がある。このセフトアップサイトは、すでに秋まで予約が一杯になっているという。

「もともと自然保護運動をしてきた私としては、森林でワイヤーする人が増えたところというのは、いい思い出があります。しかし、森林や自然のことを語るべき相手がいなければ、なにも始まらないのも事実です。実際、訪れてくれる人は増えているわけですから、そういった人たちに、いかに森林や自然について伝えていくのか、その仕組みや工夫が必要になってき

たということ、いろいろ考えているところです」

「森が平等に食事ができるというのはおかしいでしょう。最長で4日間食べられなかった子もいます。それでも、伝えるべきことは伝えることで、最終的にはみんな、すこく近しくなりますよ」

「森が平等に食事ができるというのはおかしいでしょう。最長で4日間食べられなかった子もいます。それでも、伝えるべきことは伝えることで、最終的にはみんな、すこく近しくなりますよ」

「森が平等に食事ができるというのはおかしいでしょう。最長で4日間食べられなかった子もいます。それでも、伝えるべきことは伝えることで、最終的にはみんな、すこく近しくなりますよ」

「森が平等に食事ができるというのはおかしいでしょう。最長で4日間食べられなかった子もいます。それでも、伝えるべきことは伝えることで、最終的にはみんな、すこく近しくなりますよ」

「森が平等に食事ができるというのはおかしいでしょう。最長で4日間食べられなかった子もいます。それでも、伝えるべきことは伝えることで、最終的にはみんな、すこく近しくなりますよ」



「山の日」を前にオープンした「Hammock Cafe」。

「森が平等に食事ができるというのはおかしいでしょう。最長で4日間食べられなかった子もいます。それでも、伝えるべきことは伝えることで、最終的にはみんな、すこく近しくなりますよ」

東京都世田谷区と 群馬県川場村の出会い



昭和54年、東京都世田谷区
で「区民健康村づくり計画」
がスタート。

区民の「**第二のふるさと**」
を川場村に：**安らぎと豊かさ**



⇒昭和56年「縁組協定」提携
「縁組＝結婚」「**親戚づきあい**」
本物の食＝安心・安全
世田谷区：85万人
川場村：4000人



昭和56年当時
交流人口 年間3万人余り

5年生移動教室↓33年継続

平成26年 190万人突破



世田谷区と川場村の交流事業 農大の役割(塾のコーディネイト)

健康村
里山自然学校

茅葺塾
かやづくり
かやふき
かや銀行

森林(やま)づくり塾
体験教室
養成教室
専科教室
子ども森林づくり教室

農業塾
野菜づくり
棚田のオーナー
そばづくり体験など

多様な交流





専科教室





おわりに

森林サービス産業の推進

1. 地域文化の利活用: 地域特性を活かす
2. 目的意識的な森林レクの整備: Forest Style
アウトバウンドとインバウンド
3. 多様な関係組織との連携・協同: サポート体制
の整備→専門家の養成



4. 適正な森林整備と森林サービス産業の展開

ご清聴ありがとうございました。